



こうすれば助かる!

子ども安全学入門



3. 29

清永 賢二

子どもは歩くことで世界を広げる。それだけ「危ない人」と遭遇する確率も上がる。そこで今回は、危な

い人、つまり犯罪者がどの時点で標的を定めるのか、考えたい。
 犯行時の「やる気」について、元犯罪者のグループを対象に聞き取り調査と実

験をした。その結果、犯罪者は子どもの約二十メートル先で狙いを定め、六メートル離れた地点で行動を起こすと分かった。子どもは二十メートル先でどんな人がいるか見ておき、六メートル近づくと前に「変な人」「怪しい人」「危ない人」のいずれなのか見極めなければならぬ。
 それには、歩行中にしっかりと前を見るのが大事で、その意味で「キョロキョロせずに前を見て歩きなさい」は正しい。

しかし同時に、十歳前後の子どもの目と体の発達は不十分で、キョロキョロしなければ周囲に気を配れないことも知っておきたい。「キョロキョロしてもいいから、どんな人が前にいるか注意しておこう」が、望ましいアドバイスとなる。「このよつぎにすれ違つか」も、非常に重要だ。

前から来るのが「危ない人」だった場合、その人物は六メートル先から「やる気モード」全開で、距離が三〜四メートルに縮まった時点で「縄張りに入った」とばかりに襲ってくる。その前に、子どもは横に動いて距離を稼

ぎ、それでも相手が追いつてきたら、全速力でダッシュしなければ危ない。
 犯罪者は一般に、標的の手などをつかもうとする際に、瞬間的に足を一歩前に出し、そこから手を伸ばす手順を踏む。その「魔の手」から逃れるには、少なくとも加害者の身長の一・三倍の距離を保ったまま、すれ違ふ必要がある。

こうした距離感覚は本来、鬼ごっこなどの遊びの中で身についたものだった。しかし、子どもが群れて遊ばなくなった今、幼稚園や小学校の園庭、校庭に専用の施設を設け、距離感覚を体得させる試みも検討されるべきだ。現代っ子は、文明の中で退化した「野生の勘」を取り戻す必要がある。

(日本女子大教授
 (日曜日に掲載))

20メートル先に注意して歩く

遊びの中で距離感覚体得

